

ハムスターを用いた小学校訪問活動プログラム開発とその実践

花園美樹・花園誠

1 はじめに

(1) 動物介在活動

物質文明が豊穡、人々は衣・食に満ち足り、一次産業以外にも動物の価値観を認めるようにと変容した。動物の新規な活用法が検討されるようになった中、動物の「癒し効果」には格別の期待が集中している。従来それは、動物と人の二者間のみで閉鎖的に消費されていたものであったが、最近になり、動物と人がセットとなり外界へ展開、第三者に癒し効果を提供する試み—動物介在活動—が福祉施設等で着実に普及し始めている。

(2) 動物介在教育

教育現場では、動物の「癒し効果」を情操教育だけに活用するのではなく、丸ごとの動物を生活科や総合的な学習の時間そして理科教材としても当用、多面的に活用しようという試みがなされている。我々は、この試みの全てを包括したものを「動物介在教育」と定義している。

(3) 動物介在教育のシステム

①ハード面 動物介在教育システムの構成要素は、学童及び施設(学内・学外)・指導者(教諭・学外専門家)・動物(学校・学外飼育動物)である。教育対象の学童を軸に据えると、必然的にこれらの可能な組み合わせは8通りとなる。この組み合わせの中から状況に応じたシステムを選定すればよい。しかし、どの場合でもシステム運用のためには時間と経費が必要である。

②ソフト面(動物介在教育の5W1H) 研究課題として我々は、教育者の適性(Who)、教育の臨界期及び適性時期(When)、プログラム運用の環境(Where)、教材の選定及び教育目標(What)、教育対象者の発達課題(Why)、教育の指導法並びに評価法(How)を考え、体系的な研究に着手している。

2 帝京科学大学の動物介在教育

本学アニマルサイエンス学科は「人と動物との共生」を理念に設立された。この理念のもと本学科は地域の小学校を舞台に学科の特色を生かした教育支援交流活動を展開している。活動当初は明確な目標を立てず、いわば動物介在活動的であったが、時流に鑑み動物介在教育へと深化させた。そして中川¹⁾の指摘を基に以下に記す目的を立て、地域の小学校と連携、動物介在教育についての実践的研究に着手した。

(1) 本学の動物介在教育の目的

①自己啓発・潜在能力の開発

能力には、五感、創造性、表現力を包括させて考えている。すなわち、動物の介在を契機として自



己啓発、「自分の感覚で感じとる・自分の頭で考える・自分の体であるいは記号で表現する」ことに挑戦させる。

②自我確立の補助

自我確立のためには彼我境界を鮮明にすることが一法と考えている。他者との相互作用で生ずる軋轢は、その境界を知らしめる標徴となる。その軋轢を解消するために、自分で「感じとり・考え・表現する」。このためには、軋轢を生じさせる他者の存在が必要だが、動物は共通の言語をもたない異形の他者であり、学童にも分かり易い(矢野智司²⁾)。この動物との軋轢を解消するための努力過程が彼(動物)を知らしめ、それと反響するように我が鮮明化、それが自我確立の契機になると考えている。

③協調性の涵養・動物福祉の実践

動物との関係が深まった形態には、動物を飼育することや、動物を保護することなどがある。そして、動物のための幸せな暮らし—動物福祉—を考える。つまり、動物を教材に他者への思いやりを養育するのである。

(2) 今までの活動概要

本学科では、教職員・学生が協力して大学を地域に開放する一方、要請に応じて各所に出向くなどの、動物介在教育をキーワードとした多面的な地域交流活動を実践している。主な活動内容は「動物ふれあい教室・犬のしつけ教室・障害者乗馬会」などである。協賛団体は県庁、北都留郡教育委員会、地域の小学校、町内会等で、活動エリアは拡大の一途である。本報告ではその一部である市立上野原小学校との交流活動について以下に詳述する。

3 市立上野原小学校との交流活動について

対象学童は2年生3組の101名である。これに対して毎回15人程度の学生がボランティア参加した。事前に小学校の担当教諭とプログラムの詳細の打

ち合わせをするとともに、保護者全員の理解を取り付けた。プログラム運営の円滑化を考え、各組は1班5～6名程度の6班に編成を依頼した。また活動ごとに学生が資料を自主作成、補助教材とした。一連のプログラムを実施したことによる情動的効果を判定するために、試みに全3回プログラムの実施前・後に「人・木・家」をテーマにした自由画を描かせた。

	ハムスター	マウス	犬	馬
飼育	○	○	△	×
移動	○	○	△	×
コントロール	○	○	○	○
金銭面	○	○	△	×
指導者数	○	○	△	×
人気	○	△	○	△
アレルギー	△	△	△	△

(1) 動物の選定

今回プログラムを考案するに当たり、まず動物種を選定した。下表は大学が用意可能な動物の、学生・教員による3段階評価である。

今回の実践では、総合的に評価の高かったハムスターとマウスそして補助的にスナネズミを使用することとした。

(2) プログラム内容

◆**第一回目** テーマ：「ハムスターのふれあい」。冒頭にオリエンテーションを含めたはじめの会を実施。作成した資料を配布、学生が動物の扱い方や一連の流れを手短かに説明した。ふれあいは各組を3グループに分け、ハムスターやマウスのコーナーを順に巡る方法で実践した。

◆**第二回目** テーマ：「ハムスター・マウスの観察」。学童に3通りの観察の視点を与え、動物の「形態」・「行動」・「能力」について学んでもらう趣旨で実践した。

①「形態」の観察：耳・前足・後足・尻尾の欠落した不完全な動物の絵を配布、動き回るハムスターやマウスを観察しながら欠落部分を描き込み、絵を完成させる。

②「行動」の観察：配布用紙の記入例から動物の行動のレポートを写し取り、9升(3×3)全部を埋める。その後数分間ハムスターの行動を観察、確認できた行動のレポートに逐次○をつけ、ビンゴの完成を目指す。

③「能力」の観察：学習させたマウスと学習させていないマウスを「モリスの水迷路」にトライさせ、ゴールまでの到達時間差からマウスの学習能力を実感してもらおう。同時に「マウスは教わらずとも上手に泳ぐ」という意外な事実(生得的行動の働き)に気付いてもらおう。

◆**第三回目** テーマ：「ハムスターのお家づくり」。上記2回のプログラムを体験することで動物に対する愛着や畏敬の念などが芽生えたであろうことを期待して実践。学童に飼育ケージと様々な飼育用具を与え、創造性を発揮しつつ動物のための生活空間を考案させ、「動物福祉」について原初的な体験をさせた。作製の所要時間は30分間。作製後には作品についての発表を学生ボランティアの介助のもとで各班ごとに挑戦してもらった。

(3) 活動後

プログラム実施後、学んだことを台本にとりいれた「動物探検隊」という寸劇を学童が学芸会で披露してくれた。この台本の監修には学生が関わった。学童の精一杯の演技には感動させられ、この交流活動の成果の一端を垣間見た。

また、交流活動の効果判定の参考にと交流活動前・後に描いてもらった「人・家・木」をテーマにした自由画からは、1・2組の計60名中18人に交流活動後の絵が明らかに豊かになるという変化が見られた。

4 考察

(1) 本プログラムのハード面について

本実践では学童10人に必要な学生は3人である。必要な動物は全て小型であり、飼育・移動が用意である。また、小型であることが幸いして子供が優しい持ち方を学べるなどの長所がある。短所は動物の負担が大きいことであろう。手軽なプログラムと総合評価する。

(2) 本プログラムのソフト面について

動物の習性や扱いを考え動物にストレスを与えないプログラム運用の必要がある。動物をストレス状態にすることは、咬傷事故の危険性を潜在させる。そのような状況は運用する大人を不安にさせ、延いては大人の感情に敏感な子供に何かしらの悪影響を与えると想像する。

5 結論

動物介在教育に必要なことは、教育者が本心から動物をいたわり、愛することだと考えている。子供は大人の「嘘」や「ふり」に敏感である。

6 謝辞

本研究は上野原小学校の教諭各位並びに、本学学生ボランティアのご協力で遂行されました。皆様にはこの誌上を借りて御礼申し上げます。

7 参考文献

- 1) 中川美穂子(2003) 獣医師からみた学校飼育動物の意義(動物介在教育)。In: 学校飼育動物と生命尊重の指導、鳩貝太郎・中川美穂子編、42～45、教育開発研究所
- 2) 矢野智司(2002) 動物絵本をめぐる冒険。勁草書房(帝京科学大学 山梨県上野原市八ッ沢2525)